

《企業展示のご案内》

㈱ピエール ファーブル ジャパン (アベヌ) は、第45回日本小児皮膚科学会学術大会において、企業展示をいたします。

アベヌの展示ブースでは、南仏の慢性皮膚疾患治療施設である「アベヌ テルマリズムセンター」において患者さまの治療に使われている、アベヌ温泉水100%の「アベヌ ウォーター」を始め、ご診療にお役立ていただけるデルモコスメティック製品の一部を実際に手に取ってお試しいただけます。今回は、「アベヌ ウォーター」や「保湿クリーム」の試用見本もご提供予定ですので、ぜひアベヌブースへお立ち寄りください。

【展示会場】ウェスティンホテル東京 B1F (小間番号1)

お知らせ

『お医者さま専用サイト』のご案内

アベヌ公式サイト (<https://www.avenne.co.jp>) には、『お医者さま専用サイト』を開設しております。アベヌのデルモコスメティック製品の患者さま用サンプルやリーフレットなどもご用意しておりますので、ご登録(無料)の上、ぜひご診療にお役立てください。また、過去の学会共催セミナーのまとめ資料もダウンロードいただけます。

『DERMAWEB (デルマウェブ)』のご案内



「DERMAWEB」(<https://www.dermaweb.com/en/>) は、皮膚科医の皆様の日常診療を支援するために、Pierre Fabre Dermo-Cosmétique (ピエール ファーブル デルモコスメティック社) が運営する皮膚科医向け情報共有グローバルサイトです(営利目的サイトではございません)。上記アベヌ『お医者さま専用サイト』より、ぜひご登録(無料)の上、ご活用ください。

- 国際的にも著名な25名の専門家によって検証された医療情報
- 現在世界で約2万名の皮膚科医が登録
- 様々なコンテンツ: 18の専門研修コース(ざ瘡、フォトダーマトロジー、アレルギー性皮膚炎、皮膚癌、小児皮膚、頭皮、爪、他)、約1,000もの症例報告(詳細と写真など)、約1,500ものクイズ、76のサマリー集、約28,000枚の写真やイラスト、その他臨床にお役立ていただけるツール、サービス など
- 言語バージョン: 英語・フランス語・中国語、他 ※日本語はありません。

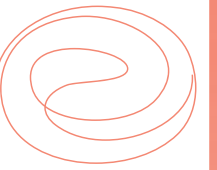
第45回日本小児皮膚科学会学術大会

共催シンポジウム②

保湿から始める 子どもの皮膚の健康

— スキンケアによる アトピー性皮膚炎の予防と治療 —

EAU THERMALE
Avène



開催日 2021年7月3日(土)

時間 16:40~18:10

会場 第1会場 (ウェスティンホテル東京 B1F 桜)

座長 大矢 幸弘 先生

(国立研究開発法人 国立成育医療研究センター アレルギーセンター長)



演者① 二村 昌樹 先生 (国立病院機構名古屋医療センター 小児科医長)

保湿剤によるアトピー性皮膚炎の
治療効果と予防効果



演者② 石氏 陽三 先生 (東京慈恵会医科大学 皮膚科学講座講師)

アトピー性皮膚炎の痒みへの
温泉水中の活性物質含有保湿剤の役割



共催: 第45回日本小児皮膚科学会学術大会
株式会社 ピエール ファーブル ジャパン (アベヌ)

保湿から始める子どもの皮膚の健康 — スキンケアによるアトピー性皮膚炎の予防と治療 —

演者
①

二村 昌樹 先生

(国立病院機構名古屋医療センター 小児科医長)

保湿剤によるアトピー性皮膚炎の 治療効果と予防効果

アトピー性皮膚炎は、乳児から成人まで幅広い年齢層において罹患率が高い慢性疾患である。特に乳児期の罹患は、その後に続くアレルギー疾患の発症に強く影響すると考えられている。アトピー性皮膚炎の治療は、薬物療法、スキンケア、悪化因子の検索と対策の3つを基本とする。スキンケアに欠かせない保湿剤は、ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏とともに薬物療法においても重要な役割を果たしている。保湿剤はステロイド外用薬と比して副作用が少なく、ステロイドへの不安を抱える家族にとっても治療の導入として受け入れられやすい。保湿剤の治療効果は、数多くの介入試験で検証されている。寛解導入時に保湿剤を併用することで、ステロイド外用薬単独に比較して高い治療効果が得られる。また寛解維持期には保湿剤塗布によって湿疹の再燃率を低下させ、長期的にはステロイド外用薬の減量にもつながる。治療目的以外に、保湿剤にはアトピー性皮膚炎の発症予防効果も期待されている。2014年に我が国からの報告で、新生児期からの保湿剤連日塗布によってアトピー性皮膚炎の発症予防効果が示され、その後の病院や健診での指導内容に大きな影響を与えた。しかし欧州で行われた大規模介入試験の結果では、保湿剤塗布による発症予防効果に疑問が呈された。さらに2021年発刊のコクランレビューでは、乳児期の保湿剤塗布にアトピー性皮膚炎の予防効果はなく、むしろ有害事象としての皮膚感染症が増えると結論付けられている。ではこの結果を受けて、我々は乳児への保湿剤塗布の指導をすぐに中止すべきであろうか。本講演では保湿剤の効果を検証した報告を供覧しながら、臨床研究の方法と結果が示す意味について考えてみたい。



〔二村 昌樹氏 プロフィール〕

1998年 名古屋大学医学部 卒業
2002年 名古屋大学大学院 医学研究科 小児科学
2004年 国立成育医療センター アレルギー科
2006年 あいち小児保健医療総合センター アレルギー科
2009年 国立成育医療研究センター アレルギー科
2012年 Centre of Evidence Based Dermatology, University of Nottingham, UK
2013年 国立成育医療研究センター アレルギー科
2015年 国立病院機構名古屋医療センター 小児科・アレルギー科

MEMO

座長

大矢 幸弘 先生

(国立研究開発法人 国立成育医療研究センター アレルギーセンター長)

演者
②

石氏 陽三 先生

(東京慈恵会医科大学 皮膚科学講座講師)

アトピー性皮膚炎の痒みへの 温泉水中の活性物質含有保湿剤の役割

アトピー性皮膚炎は、痒み・バリア破壊・免疫異常などの複数の要素が複雑に連動して発症すると考えられている。この中で、患者の生活の質に重要な影響を与える因子のひとつが痒みである。痒みは、その症状自体が不快な感覚であると同時に、搔破行動を誘発し、搔破によりバリア機能障害や皮疹の悪化を来すItch scratch cycleの悪循環を呈してしまう。これが、アトピー性皮膚炎の難治化の一因と考えられている。そのため、痒みを制御することは治療上、非常に重要である。近年、痒みのメカニズム解明が進み、アトピー性皮膚炎の痒みの機序が明らかにされてきた。その結果、従来は痒みの主要なメディエーターと考えられていたヒスタミンではなく、ヒスタミン以外の経路が重要であることが示唆されている。そのため、アトピー性皮膚炎の痒みを抑えるにはヒスタミン以外の起痒物質へのアプローチが必要である。近年、アベヌ温泉水の源泉に特異的に生息する細菌*Aquaphilus dolomiae*が発見され、その培養抽出エキスには炎症性メディエーター発現調節作用、抗菌ペプチドの発現誘導、痒み抑制など様々な作用のあることが判明した。そこで新たに、この成分を含有した保湿剤がピエールファール デルモコスメティック社にて開発された。この新規保湿剤には、皮膚の保湿効果のみならず痒み抑制効果が期待されている。特にアトピー性皮膚炎で重要視されているヒスタミン非依存性の痒みに関係するプロテアーゼ活性化受容体(protease-activated receptor: PAR)やTSLP(thymic stromal lymphopoietin)などの調節作用が報告されている。また、本邦で行った日本人の小児を対象とする臨床研究においてもその有用性が報告されている。本講演では、アトピー性皮膚炎の痒みの発生機序から新規保湿剤の臨床効果を概説する。



〔石氏 陽三氏 プロフィール〕

1976年 7月31日生まれ
2001年 3月 東京慈恵会医科大学医学部 卒業
2001年 5月 東京慈恵医大附属病院皮膚科研修医
2003年 4月 東京慈恵医大附属本院病院皮膚科レジデント
2005年 7月 Wake Forest大学皮膚科研究員
2007年 7月 東京慈恵医大附属本院病院皮膚科助教
2008年 7月 NTT東日本関東病院皮膚科診療医員
2016年 2月 東京慈恵医大附属本院病院皮膚科講師 現在に至る

MEMO